

東洋美術史研究に必備の書

『古画備考』は最も永く用いられてきた画家人名辞典として、東洋美術史研究の基本文献であり、日本に伝存する作品を研究する際に、今でも最初に確認・参照すべきものである。今回の刊行では久しく公開が待ち望まれた自筆原本の全容、さらに各作品情報の刊行ごとの変更過程が明らかにされる。それは、近代日本における『美術史』成立過程の様々な問題を提起することになる。東洋美術史研究に必備の書！一九七〇年復刻本に替わる新たなバイブルの登場である。

板倉聖哲（東京大学 東アジア絵画史）

美術史への架橋

近世を「画史画伝」、近代を「美術史」の時代とするなら、『古画備考』は両者を架橋した存在だ。画人伝、縮図、印章、落款等の膨大な情報、伝記は美術史の基盤となり、縮図等は失われた歴史を今に垣間見せる。早くから史料としての重要性が認識されながら、原本・写本・増補本の関係が問題となっていた。それが玉蟲さんたち研究チームの長年の成果で、第一級の史料翻刻として実現した。当時最高の学術知と歴史風景を目撃できるだろう。

佐藤道信（東京藝術大学 近代日本美術史）

日本美術史研究への福音

待ちに待った刊行である。玉蟲敏子氏を中心に日本美術史研究の精鋭が集われ、朝岡興禎自筆原本『古画備考』校訂の研究会在長く続けられていた。その地道で尊い活動の成果がこうして世に出される。日本美術史にとつての福音である。朝岡興禎の知識と洞察の総体『古画備考』は前近代の古書画研究の達成であり、その出版は近代における日本美術史研究の黎明でもあった。それを二〇二一年の今、改めて丁寧な読み込みによる原本の全翻刻、校訂の姿で手に取ることができる。江戸の学知に触れ、思いを新たにさらなる研究が始まる。恩恵は計り知れないほど大きい。

佐野みどり（『國華』主幹 日本美術史）

美術史学史研究の基盤

『古画備考』は日本美術史の基礎文献である。この度、玉蟲敏子氏をはじめ第一線の研究者によって朝岡興禎の自筆稿本が校訂され、全翻刻されたことの意義は絶大である。本書は『古画備考』の原本の記載内容や落款・印章の画像、朝岡による縮図を収載し、幕末の古書画研究の実態をつかめると同時に、近代に『古画備考』が世界中に及ぼした影響をたどれる。今後の日本絵画史研究、美術史学史研究の基盤となる本書の上梓を喜ぶたい。

ユキオ・リビット（ハーバード大学 美術建築史）

古画備考研究会

二〇〇三年四月に原本『古画備考』の復元を目指す研究会として発足。途中メンバーの交代を経て、二〇一二年四月以降は『校訂 原本 古画備考』の出版に取り組む。

五〇音順 本書に関わるメンバーのみ
*は編集委員

相澤正彦（成城大学）

五十嵐公一（大阪芸術大学）

井田太郎（近畿大学）

出光佐千子（青山学院大学／出光美術館）

*北野良枝（元東京藝術大学）

*高橋真作（文化財活用センター／東京国立博物館）

*玉蟲敏子（研究会代表、武蔵野美術大学）

*鶴岡明美（昭和女子大学）

並木誠士（京都工芸繊維大学）

成澤勝嗣（早稲田大学）

野口剛（根津美術館）

畑靖紀（九州国立博物館）

本田光子（愛知県立芸術大学）

宗像晋作（大分県立美術館）

山口真理子（城西国際大学水田美術館）

吉田恵理（静嘉堂文庫美術館）

古画備考研究会編

A5判上製函入・総三四〇頁／定価七七、〇〇〇円

思文閣出版

校訂
原本

古画備考

全五巻

2021年
夏
刊行
予定

題字の出典…巻三十七旧表紙（巻四十六所収）より

朝岡興禎の原本

『古画備考』

初の翻刻・校訂決定版

岡倉天心の座右にもあった、

江戸時代の『古画備考』原本の姿を忠実に再現。

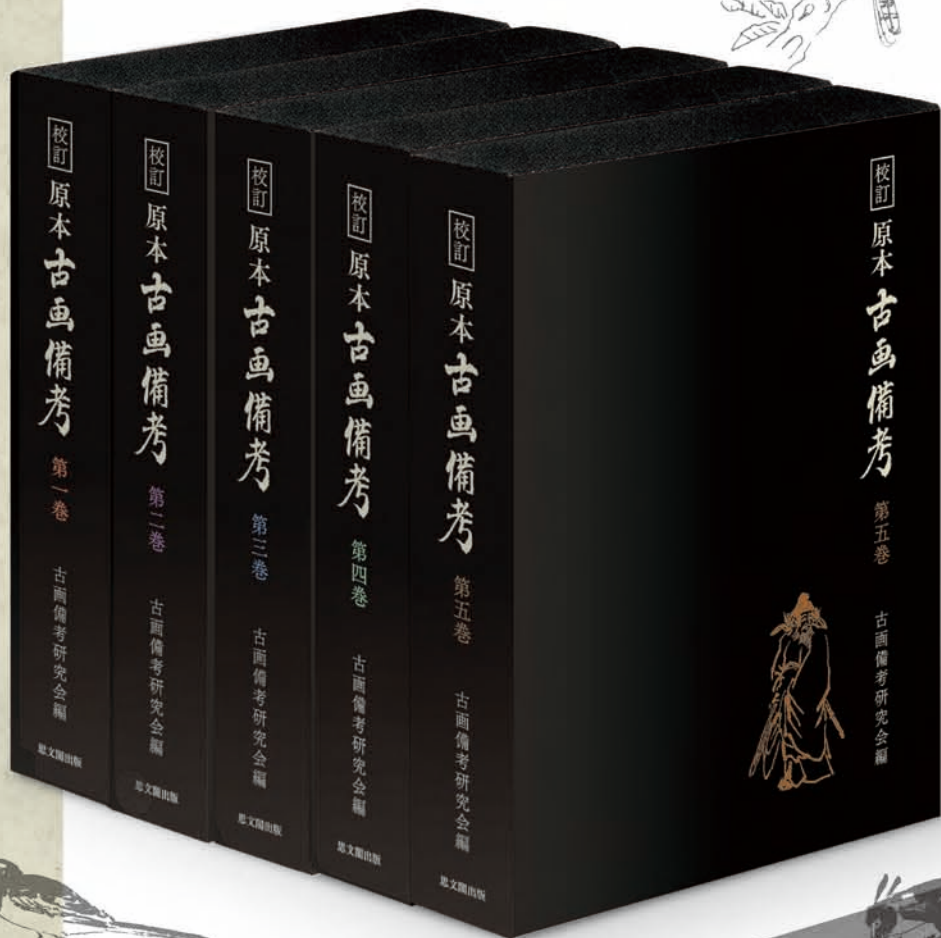
近代に編集された『増訂 古画備考』を大胆に革新。

現代の視点から、美術史成立前夜における

江戸の学知の達成を世に問い直す、

古画備考研究会による永年の成果が

ここに完結。



原本初の 翻刻

現在、広く流布する明治時代に刊行された『増訂古画備考』（以下、活字本）の底本は写本であり、原本そのものの翻刻は本書が初めて。

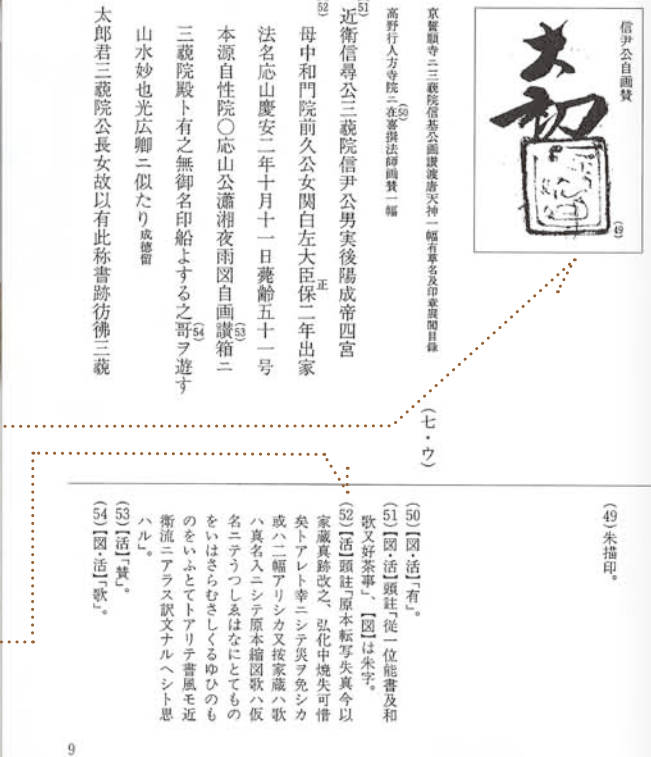
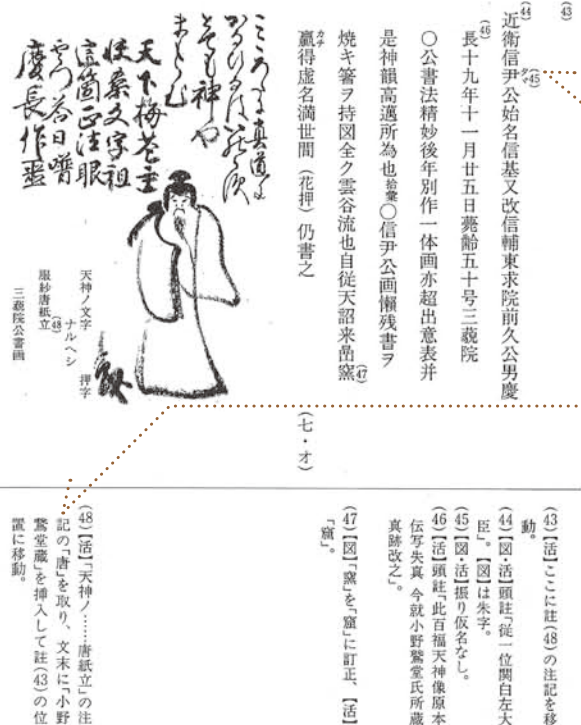
校訂本

原本に忠実な翻刻 小字註（傍書、振り仮名、印文註記、メモ書）等も忠実に翻刻し、活字本では知りえなかった情報を収録。また、活字本では困難だった原本との対照も容易。

校異を示す脚註 活字本とその底本（原本の写本＝図書寮印本）の校異を示すことで、明治時代以来の校訂経緯が、簡潔にわかる。

◎東京藝術大学附属図書館蔵、朝岡興禎編著「古画備考」巻一～四十八（嘉永3＝1850年起筆）を底本に、朝岡自筆の縮図、印章、署名等の画像とともに全翻刻、項目索引を付す。
◎原本に含まれない巻四十九～五十一は、東京国立博物館蔵「古画備考」（図書寮印本）を底本に同様の校訂を行う。
◎太田謹増訂本（明治36＝1903年初版、明治45＝1912年校訂増補第二版、弘文館刊／昭和45＝1970年復刻、思文閣刊）と、その底本である東京国立博物館蔵本（図書寮印本）より校合を行いその校異を註に記載。

【組み見本】 卷三 廷臣二 近衛信尹 の項



オリジナル画像の収録 兄の晴川院（狩野義信）を補佐するほどの腕前だった、朝岡自身による巧みな縮図や写し等の画像を収録。

増補箇所がわかる 活字本編集時における増補箇所は脚註・補註でカバー。近代美術史においてどの部分がアップデートされたかを知ることができる。

原本

【組み見本】 卷四十六 二十四孝狩野家拾人寄合書 より

内容目次

『古画備考』とは

江戸幕府お抱えの奥絵師、木挽町狩野家に生まれた朝岡興禎（二八〇、五六）が、絵画鑑賞に資するため、多年苦心研鑽の末編纂した大著述で、古美術研究の基本書として不朽の名著である。

第一巻

卷一 帝室（天皇・親王など）／卷二・三 廷臣（皇后・廷臣など）／卷四～六 武家（江戸期までの武家、大名など）／卷七～十上 釈門（江戸期までの僧）／卷十下 松花堂流（松花堂昭乗とその門人）

第二巻

卷十一 釈門（黄髪面僧、禪僧、画僧など）／卷十二上 詩人／卷十二下 和歌・連俳・茶香・雑／卷十三～二十 名画（平安中期までの記録上の専門絵師、平安中期～鎌倉初期の絵仏師や宮廷画人、鎌倉～室町初期の画人・仏師、曾我派、阿弥派、雪舟とその門人など）

第三巻

卷二十一～二十八 名画（室町後期～桃山期の水墨画逸伝画人、関東画人、雲谷派および雪舟末流、長谷川派、海北派、特定の画系に属さない画人、長崎画人、文人画家、天明～寛政年間の画人）／卷二十九・三十 名画 近世（文化・文政年間の画人）／「広益諸諸人名録序」「画乗要略」「山中入饒舌」「画意」「文川画譜等」の写本

第四巻

卷三十一 浮世絵師伝／卷三十二 巨勢家（大和絵の巨勢、宅麿、住吉、芝、栗田口の各流派）／卷三十三 土佐家（土佐派）／卷三十四 住吉家（住吉派、板谷派）／卷三十五 光悦流／卷三十六～三十九 狩野譜（中橋狩野家、鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、諸系図）／卷四十 狩野門人譜

第五巻

卷四十一～四十三 狩野門人譜（中橋狩野家、鍛冶橋狩野家、木挽町狩野家、駿河台狩野家、浜町狩野家の各門人とその系譜）／卷四十四 英流（英一蝶以下の本流とその門人）／卷四十五 禁裏造営部類（御所・大坂城・江戸城・寺院等の障壁画の画題や作者を記した様々な史料、朝鮮に贈った屏風資料など）／卷四十六 二十四孝狩野家拾人寄合書（印譜、略画譜、朝岡の見聞録など）／卷四十七 倭絵名目（物語・史書・歌集・随筆など文献資料に言及された絵画制作者、組織、絵・障子・絵壁・屏風の種類や画題・描法など）／卷四十八 巻物画像種類（障壁画、絵巻物、肖像画部、仏画、神道絵画、雑類など）／卷四十九 長崎画人伝／卷五十・五十一 高麗朝鮮画人伝

現代的校訂とレイアウト 草稿段階における朝岡の生々しい試行錯誤の痕跡がわかるよう、参照可能な範囲で、原本通りの本文を再現。小紙片の貼り合わされた立体的な仕様の原本を平面化し、活字本では読み取れない本文や貼紙を適切な場所に配置・整理して、朝岡が書き付けたコメントとの有機的関係までも復元。

校訂本

活字本

